唱歌遊戯の系譜

―明治期―

名須川　知　子

1. 唱歌遊戯の導入

唱歌遊戯の源をたどると，幼児のための保育内容として，はじめて我が国に紹介されたと推測される文部省雑誌第27号「幼稚園演習方法ノ注解」（明治７年）を見出すことができる。本雑誌にはアメリカ視察の報告として“幼稚園の説，その他”が掲載されており，遊戯題材として「風車，水車，遊魚，農夫」等が紹介されている。

一方，当時我が国では，伊沢修二が，愛知師範学校長時代（明治７年～同８年）に下等小学校で唱歌遊戯を実施することを「唱歌遊戯ヲ興スノ件」で述べ，実践例として「椿，胡蝶，鼠」を示している。さらに，当時は外国書の翻訳もなされた。中でもドイツのフレーベルの幼稚園思想における保育内容としての唱歌遊戯が，我が国草創期の幼稚園に大いに参考となった。

明治初年に欧米から持ち寄られた保育文献の中で唱歌遊戯に関するものは，Johann & Barta Ronge 著，桑田親五訳「幼稚園（おさなごのその）１～３巻」（明治10～同12年訳）及びAdolf Douai 著，関信三訳「幼稚園記，１～4巻」(明治10年）がある。さらに，４巻に「幼稚園記附録」としてMrs. Horace Mann & P. Peabody 著「幼稚園案内」も抄訳された。そこには，フレーベル主義の継承である幼稚園教育理論及び方法が示され唱歌遊戯も紹介されている。我が国の唱歌遊戯題材は，殆どが翻訳から採用されている。例えば，「風車，遊魚，家鳩」等は，“The Windmill, The Fishes, The Pigeon House”からである。当時，曲は雅楽調でありながら，題材だけを翻訳遊戯から採っていることが推測される。

2. 唱歌遊戯の受容（明治20年代）

明治20年代に入り，ようやく我が国の保育内容に受容，摂取した形で遊戯が取扱われる。明治20年代の唱歌遊戯に関する著書５冊にみられるものは，「風車，水車，蝶々，蛙，雀，門」等であり，これらは明治期全般を通して長く教材として残るのである。当時の代表的著作として，大村芳樹「音楽之枝折（下）」を挙げることができる。初版は，明治20年であるが，同27年，29年に改訂再版されている。唱歌遊戯教材は「車，蝶，盲鬼，対舞」（初版）に加え，「門，鼠，雀，民草，桜，池ノ鯉，兄弟妹，汽車」等，教材数は40作品に増えている。明治20年に「幼稚園唱歌集」が文部省取調掛から刊行され，それらの曲に合わせて動作を行う方法が紹介されている。遊戯の内容は，例えば「風車」では，円陣の中に８人の子どもが十字に手を組み，風車を模して雅楽調の唱歌に合わせて歩く方法や「ここなる門」という唱歌に伴って，二人の子どもでつくった門を通り抜けるという遊戯方法が示されている。その殆どが，唱歌の歌詞の内容が変化しても，動作は変わらず，同じ動作の繰り返しがみられ，隊形も同一である。

その他，題材の特徴として明治29年版では「軍隊遊び」のような戦争題材が加えられ始める。また，勧学や友好など徳目的，教訓的な歌詞の内容も多くみられる。

3. 唱歌遊戯の増加（明治30～40年代）

明治30年代に入ると唱歌遊戯に関する著書が46冊に増加し，遊戯教材も206作品に増える。特に明治34～５年を中心に，新作品が次々と増え，「お月様，桃太郎，カラス」のような作品は，以後長年にわたり多くの著書でみられる。この頃の題材は，幼児の経験や，身近な自然物を採り上げたものが多い反面，「必勝曲，いでや兵士，軍鑑」等の戦争題材も増え始める。また，「忠孝」のように，その題材は雀であっても，歌詞の内容は忠君愛国の精神が含まれているものもある。

遊戯の内容は，例えば「お月様」では，前半は集団で手をつなぎ三日月や満月の形を描写的な隊形変化で表し，後半は，個人で行う身振り動作で「日本中を照らす」の歌詞を表す。唱歌は拍節的で洋楽調となっている。また，例えば「桃太郎」でみられるように「我れにも一つくれたまへ」では，両手を差し出しおじぎをする，という動作にみられるように「動きの表情性」が強調され，一拍一動作や一拍二動作による歌詞のあて振り的な模倣動作がみられる。さらに，明治35年につくられた「カラス」の遊戯は，前半は，カラスの模倣動作を行ない，後半は，円形に行進する，というような模倣動作と行進の組み合せとなっている。

以上のように，翻訳遊戯から始まった唱歌遊戯は，時代を経るにつれ，我が国独自の遊戯教材の開発が行なわれ，それに伴ない幼児の興味，関心にそった題材による作品が教師によってつくり出されていくのである。しかし，唱歌の歌詞は，時代の影響を受け，徳目的で，忠君愛国の精神が多くみられるようになる。その遊戯の動きは，拍子に合わせた拍節的なものである。この唱歌遊戯の反省から，大正期になると，より叙情的な旋律と動きをもった「童謡」が生み出されるが，明治以前から存在している「わらべ歌」は，殆ど教材として採り上げられることはなく，遊戯の中で歌と動きの結びついた価値は見出されなかったのである。